『森田友昇著作集』について

安田吉人

本年三月、福生市文化財総合調査報告書第二十五集として、『森田友昇著作集』が同市教育委員会から刊行された。福生出身で、明治初年の横浜・多摩俳壇を代表する俳諧師となった森田友昇の作品を、約一五〇頁に及ぶ冊子にまとめたものである。

著作集に載録した資料の調査・解説を担当した関係で、その概要を本誌に紹介するようにと市史編さん室から仰せつかった。そこで、本稿では編纂（森田文庫調査）の経過・目的・主な内容・今後の問題点などについて、簡単に報告させていただくことにする。

昭和六十年度に、福生市郷土資料室に開かれた「森田文庫」[注1]は、市内在住の森田崇旦氏旧蔵の書籍を中心にした資料である。森田家は、明治初年まで「中福生大学」と呼ばれる寺子屋を経営し、近隣子女の教育に貢献してきた旧家である。また、明治十二年に松原庵四世を襲名したことで知られる、俳諧宗匠森田友昇を出した家でもある。

福生市では文化財総合事業に基づき、森田家所蔵資料の全貌を明らかにするため、昭和五十九年度より三ヶ年計画で第一次調査を行った。主任調査委員には、俳文学研究の第一人者であられる尾形仂成城大学教授（当時）が当たられ、同大学近世ゼミナール会員を調査員として、森田家蔵書の膨大な資料の分類・読解が進められた。調査の成果は、昭和六十二年十一月、『森田文庫資料目録』（福生市文化財総合調査報告書第二十集・福生市教育委員会編）にまとめられ刊行された。目録には、俳諧・漢詩文・教育の分野を中心にした八一二点の書籍、俳句短冊・漢詩幅・画幅を中心にした二一九一点に及ぶ肉筆資料、貴重な芭蕉書簡[注2]を筆頭とした一四七点の書簡などが紹介されている。一地方の文庫目録としては、他にあまり例を見ない大部なものであり、森田文庫蔵書の豊富さはこの一冊からも窺い知ること

ができる。

しかも森田文庫の資料は、単に森田友昇個人や俳諧関係だけに止まらず、多方面の分野に及んでいる。幕末に空前の流行を見た漢詩文や、近代絵画以前の風流な文人画などは、見る者を楽しませ、なおかつ視野を広げてくれるものである。縦軸には、友昇に連なる近世初期から明治期までの俳諧の歴史、横軸には、友昇と関係した同時代の文人たちとの交流。友昇を中心にして、その興味は尽きることなく派生していく。郷土資料室では、このように多彩な森田文庫収蔵資料を、一つの分野に偏ることなく、できるだけ多角的に市民の方々にご覧いただくため、毎回さまざまなテーマを掲げて企画展を開催してきた。

昭和五十六年……「日本近代文人の遺蹟」

五十八年……「庶民の文芸・俳諧――芭蕉から友昇へ――」

「漢詩人・大沼枕山――俳人友昇をめぐる人々――」

六十年……「閨秀画家・奥原晴湖――俳人友昇をめぐる人々――」

六十二年……「福生ゆかりの江戸文人――大田南畝――」

「森田文庫書籍展」

六十三年……「漢詩人大沼枕山の世界」

「多摩の日記展」

平成元年……「芭蕉とおくのほそ道展――森田文庫旧蔵資料から――」

展示の多くは、これまで文学史の上で、かならずしも重視されてこなかった幕末から明治初期の文人に、新たにスポットを当てるという意欲的な企画であった。近年ようやく国文学研究においても、当時の漢詩・俳諧・小説を再評価する傾向が見られてきたが、福生市郷土資料室の展示企画は、まさしくそれに先行するものであった。そして、しばしば展示が新しい資料の発掘をもたらすきっかけとなり、学界[注3]にも貢献してきた。

一方、森田家蔵書は「森田文庫」として、昭和六十年度以降、漸次福生市郷土資料室の管理するところとなり、近代的設備の整った収蔵庫に保管されることとなった。さらに、平成四年度からは三ヶ年計画で、蔵書のすべてをマイクロフィルムに収める作業が進められている。これは、貴重な原資料を傷めることなく、一般の閲覧者に簡便に資料を公開するためには欠くことのできないシステムである。国立国会図書館や各大学図書館など、古い貴重書を収蔵している全国の図書館で、近年急速に導入されつつある最新の閲覧方法である。依然として資料の閲覧に厳しい制限を設けたり、未公開にする収蔵者が多い中で、公的な文化遺産として、多くの方々に閲覧・活用されることを願う森田

文庫にとっては、資料保存の上からもマイクロフィルム化の完成が待たれる。

このように着実に資料整理・保存のシステム化が進む中で、特に友昇の活動を中心に、蔵書を個別に精査する第二次調査（平成二年度まで）も継続されて行われてきた。今回刊行の運びとなった『森田友昇著作集』は、この第二次調査の報告を兼ねたものである。文庫の中核をなす森田友昇の著作をまとめ、改めてその業績を明らかにしようと企図されたものである。私は引き続き第二次調査に携わらせていただいた縁で、資料の解読・解説の任を仰せつかった。しかし、明治初期の俳諧資料は、月並返草集などの小冊子を含めると枚挙の暇がなく、刊行の全貌すら明らかになっていないのが現状である。友昇の作品に関しても、森田文庫蔵書以外の未発掘資料がかなり存在するのは確実で、私自身は当初、企画に躊躇するところがあった。しかし、第二次調査までの到達点を示し、それを今後の調査で増補・改定する方が作業の上で効率がよいという郷土資料室からの励ましを頂戴し、編集に取りかかることとした。

『森田友昇著作集』には、現在私たちの管見に入った友昇の資料を網羅し、便宜的に撰集編・発句編・連句編・付録編の四項目に分類した。巻末には解説として拙稿「森田友昇の生涯」と人名索引を添え、爾後の研究調査のための便宜を考えた。収載した作品は以下の如くである。

撰集編
一、高むしろ集
二、横浜地名案内
三、浅川集

発句編

連句編
一、友昇・子紹・古麦・嵐松・三木雄五吟「千鳥聞」歌仙
二、友昇・見外両吟「此浜に」歌仙
三、古麦・嵐松・友昇・左助坊・一雨・瓢哉・見外・清倜八吟「起されな」表八句
四、友甫・友昇・為山・三木雄「更衣四吟」歌仙
五、萩露・友昇「海苔両吟」歌仙（草稿巻）
六、同（清書巻）
七、萩露・友昇両吟「身に過た」歌仙（初案）
八、同（二案）
九、同（三案）
十、同（清書巻）
十一、同（清書改案）
十二、友昇・萩露両吟「聞ぬ夜を」歌仙
十三、萩露・楳外両吟「友昇追悼」歌仙

付録編
一、友昇画像

二、俳諧名家三幅対番付
三、蕉俳位附
四、年中日記抄
五、平塚梅花漢詩幅
六、松原庵嗣号披露惣評
七、真福寺書画会ちらし
八、墓碑
九、松原庵友昇・桜庵太麗両居士追福句合
十、天野佐一郎「森田友昇像」賛幅
十一、友昇印譜

これまでにも友昇に関する論考[注4]はいくつか発表されており、その著作も部分的には紹介されてきた。しかし『森田友昇著作集』を編むにあたっては、大部の撰集に関しても省略せず、全文を掲げることにした。また、半数以上が新出資料によったが、先行論文から引用する場合にも、可能な限り原本に当たり直し、誤読等を正した上で集成した。以下、載録資料について、簡単に紹介する。

撰集編は、文字通り友昇自らが編集・刊行を行った作品集である。『高むしろ集』(明治三年序)は、友昇が俳諧師として横浜の地に名乗りを上げた時の俳諧撰集。巻頭には友昇と東京・横浜の著名俳人の他、福生村にあった時に俳諧の指導を受けた友甫と巻いた連句を収める。『横浜地名案内』(同八年刊)は、横浜八景を詠む風雅集と、地名尽くしによる名所案内からなる華やかな書。本書は再版本を刊行するほど好評だったようで、横浜では地理の副読本としても使用されたと伝えられており、友昇の名を一躍世に知らしめた。著作集では、人気があったと思われる横浜八景の挿絵部分もそのまま掲載した。新旧の横浜風俗が穏やかな筆致で描かれており興味深い。『浅川集』(同十三年跋)は、白井鳥酔・榎本星布らの庵号「松原庵」四世を継承した時の記念俳諧撰集。全国の俳人から発句が寄せられた大規模な撰集だが、特に横浜・多摩地方の在村俳人は多数入集している。また、序文に記された松原庵嗣号のいきさつは、当時の多摩地方を支える有力者の存在を垣間見させ、文化史的にも興味深い。五年おきに刊行されたこれらの撰集は、当時としては体裁・内容ともにかなり充実したもので、横浜・多摩俳壇における友昇の地位を、しだいに不動のものにしていったと考えられる。

発句編は、その他の俳諧撰集などに入集した友昇の作品を集成したものである。森田文庫の蔵書の他、国立国会図書館・神奈川県立文化資料館蔵の明治期の俳書を虱潰しに当たった。しかし、残念ながらこれまで『横浜の俳人たち・横浜俳壇史Ⅰ江戸編』(石井光太郎著・昭和四十七年刊)や『近代俳句のあけぼの』(市川一男著・昭和五十年刊)に紹介された発句の中には、原本を確認できなかったものもある。

連句編には、撰集編所収以外の作品を挙げた。特に四以下は、すべて写本の新出資料である。四は友昇の師友甫、俳壇の実力者為山・三木雄と巻いた豪華な顔触れの歌仙。五―十三は、友昇と同じ横浜南仲通りで商店を営み、親しく俳交を結んでいた萩原萩露関係の資料。草稿の添削や批評の中には友昇自筆のものもある。「俗中の俗」と卑俗な作風を戒め、「言葉重し」と表現のねばりを嫌う評言も見え、当時友昇が求めた作風が推測できる。また、友昇追悼歌仙の前書きは、友昇の死亡時期を確定する傍証となった。

付録編では、当時友昇が俳壇においてどのような位置にあったかを、多面的にとらえるために、番付・書画会などの関連する資料を挙げた。また、四の「年中日記抄」には、松原庵嗣号に関連する記事や、友昇急死の報に接した記事が見える。俳諧の師として、福生において最も友昇とつながりの深かった友甫の日記ならではの貴重な新資料である。付録編で挙げた資料の多くは、地元福生市周辺で新たに発見・報告されたもので、今後も新資料の出現が期待される。

以上、簡単に『森田友昇著作集』の概観を行ってきた。載録した資料は、福生市史編さん室を始めたとした、多くの方々の御教示によって、第二次調査終了時点で集めることのできたすべてのものを網羅した。しかし、本書は前述の通り、今後の叩き台であり、未完成な部分は多い。

例えば、友昇の生涯[注5]についてであるが、福生を離れた時期など、依然として不明な点も多い。かろうじて千村美礼子氏や故森田英雄氏の御記憶によって、友昇の生活の輪郭がおぼろ気に見えているのが現状である。横浜市の公文書は震災禍で失われ、当時の公的文書による裏付けは期待できない。友甫の日記や萩露の追悼集によって、近年ようやく友昇の没年が確定されたように、同時代の確実な資料は不可欠である。そのことからも、付録編に示したような、多方面にわたる友昇関係資料の充実が切望される。特に、師田村友甫が遺した言説は、今後も友昇の俳諧活動を裏付ける貴重な資料となろう。また、いまだ明らかでない横浜以前の経歴や、俳諧における具体的な福生との交流を知るためには、やはり地元から紹介される資料に期待するところが大きい。

撰集編・発句編・連句編については、友昇の作品について網羅できているわけではないので、今後も新資料発見の度に、随時『郷土資料室年報』に補遺を掲載することにする。なかでも、石井光太郎氏[注6]が未見の友昇の著作として書名だけを紹介しておられる『開化乗合噺』は、俳諧師以外の側面を開く作品として発見が待たれる。なおすでに、本書刊行後に萩原アツ氏所蔵の草稿類から、友昇・萩露の歌仙懐紙が発見された。このような、増補は今後も頻繁に行われることになろう。

福生市郷土資料室では、森田文庫を基礎として、さらなる郷土研究資料の充実を図るために、現在も郷土に関係深い俳諧・地誌などの書籍・図絵の収集に努めている。そして、資料は企画展示などを通じて、多くの方々に実際にご覧いただける機会を用意したいと考えている。現に、今回の著作集の連句編に貴重な資料をお貸しくださった萩原アツ氏との関係は、氏が友昇と祖父萩露の交流をお知りになり、展示室に足を運ばれたのがきっかけであった。このような企画展示・出版物による新たな交流は、森田文庫所蔵の大沼枕山関係資料展示の時にも見られたことである。十一月からは、その萩原氏所蔵の資料を中心にして、企画展「俳諧の系譜――松原庵友昇をめぐる人々――」が開催された。

郷土が生んだ俳人森田友昇は、文学史の上で不遇な時代とも言える明治初年を活躍の時期としたがゆえに、これまでなかなか注目されなかった。調査に携わった者として、『森田友昇著作集』を手にされた方々が、先入観なしにその作品を御自分で味わっていただければと思っている。そして、この一書をきっかけにして、新たな友昇研究、福生・多摩俳壇研究の交流の輪が広がることを願ってやまない。

（付記）

最後に今後の森田文庫について私見を述べる。著作集編纂にともない、私も改めて資料を求めてみた。しかし、幕末から明治初期の俳諧資料は、雑多で正確な刊行状況がつかめぬうえに、文学史上で軽視されてきたため、資料が整理され一括して大量に閲覧できる所はほとんどない。これまでの研究は研究者個人の蔵書に負う所が大きく、部外者には簡単に閲覧することができない。このような状況を顧慮すると、森田文庫は資料の豊富さ、閲覧の簡便さから考えて、今後、明治初期の俳諧研究の一拠点となりうると思われる。ちなみに、芭蕉没後三百年記念の事業として、平成六年刊行予定で準備の進められている『俳文学大辞典』には、「森田文庫」の名も立項される予定になっている。

注1　拙稿「森田文庫をめぐる人々――江戸最後の文人像――」（『みずくらいど11』平成二年）

注2　元禄六年十一月八日付怒誰宛芭蕉書簡（『連歌俳諧研究十四』昭和三十二年）。

注3　東京俳文学研究会では、平成元年十一月の例会を、森田文庫の俳書見学を兼ねて福生市郷土資料室で行った。

注4　特に『横浜地名案内』には、石井光太郎編『よこれき双書第九巻　新輯横浜地名案内』の影印本がある。

注5　『横浜沿革誌』（太田久好著・明治二十五年刊）をはじめ、数種の論考があるが、友昇の生涯については誤謬も多い。

注6　石井光太郎氏は、友昇は講談「小僧殺し」に長兵衛の名で登場する横浜草分けの名物男であったと紹介されるが、国会図書館蔵の三種の『小僧殺横浜奇談』には、その名がみえない。

（やすだ・よしひと　関東学院女子短期大学非常勤講師　川口市在住）